

News! the 世界遺産

「みんなで話そう 世界遺産と市民生活」 五味文彦さん、上野邦一さんと市民がディスカッション

鎌倉の世界遺産登録の取り組みに大きな意味を持つ対話集会（古都フォーラム鎌倉・鎌倉地方自治研究センター・鎌倉世界遺産登録推進協議会の共催）が、去る2月9日（土）午後、鎌倉生涯学習センターで開催されました。放送大学教授の五味文彦先生、奈良女子大学特任教授でイコモス会員の**上野邦一**先生の講演の後、座席数50人の部屋を満席にしての活発な意見交換がなされ中身の濃い集会となりました。講演と対話集会の内容をご紹介します。なお、全録は追って冊子に致します。どうぞご利用ください。（古都フォーラム鎌倉）

【要旨】 五味文彦さん

◎ 鎌倉の世界遺産登録の問題点

鎌倉では「中世城塞都市・鎌倉」として世界遺産登録の準備作業を進めてきた。しかし、城塞都市の中核となる山稜部の調査や仏法寺跡の発掘調査などの結果、世界遺産登録のコンセプトとしては、他との比較において「城塞都市」では難しいだろうということで、改めて自然風土や景観との

観点から鎌倉の文化を、七つの文化に分類して捉え直し、さらに歴史的変遷を加味して打ち出されたのが「武家の古都・鎌倉」というコンセプトである。

武家の古都というと武士のイメージが強く、武力というマイナス評価もあるが、一方で、武士が自ら築いた政権によって、自然環境に即した自前の都を建設し、その中で新たな文化の担い手となって、今に伝わる民衆文化を育んできた。

武家の古都・鎌倉の「鎌倉」は、鎌倉時代の鎌倉であり、鎌倉新仏教の鎌倉であり、独自の都市構造の中に育まれた七つの文化が、有機的に結びついて一つの宇宙を形成している。鎌倉の特徴はまさにここにある。都市の総体を遺産として登録すべき、と考えてみた。



五味先生、上野先生と 市民とのトーク（抜粋）

——鎌倉は遺跡と同居しているとも言える。「生きている都市」としてどのようなプレゼンをしたらいいか。

五味 遺跡も含めて自分たちの住む街として議論することが必要。御谷のときのように鎌倉には潜在的な力は十分にある。自分たちの力を信じて行政とタイアップして登録に持って行ってほしい。

上野 やぐらを見て非常に面白いなと感じた。ある家の中に取り込まれて、そのまま物置とかガレージとして使われている。当時の鎌倉の文化を現すと同時に、現代の人がそれを再利用して生活に取り込んでいる。これこそが「生きている都市」の在りようだと思う。

五味 いまやぐらで大事なものは崖崩れや開発などでどんどん消えていくという状況だ。そこに納め

られている五輪塔などが盗まれるという問題もある。

上野 鎌倉で盗掘というのは初めて聞くが、文化遺産を守っていくには、その遺産の意味とか位置づけをしていくためにも、教育は大前提だ。これは研究者の役割でもあるが、知らないで壊すということもある。

——五味先生の研究者も取り込んだ活動ということになる。

五味 そう、行政は行政で、市民は市民でそれぞれ一生懸命にやっている。一方で、誰かがやっているからいいだろう、という冷めた市民が多い。研究者をドンドン使って、そういう人たちの目の色を変えさせるようなプラスアルファみたいなものを、運動として打ち出していくことが必要だ。鎌倉にはそれだけのものがある。

上野 目の色が変わっていないということだが、暫定登録されて10何年も経っているが、鎌倉市